

エゴグラムからみた看護学生の特徴

成人・老人看護学 武藤 眞佐子

Analysis of the Characteristic of Nursing Students with Egoqram

Masako BUTO

要 旨

著者が研究してきた看護者の成熟性のエゴグラムの特徴は、「N型」から「への字型・ベル型」へと変化することが示唆されている。看護学生のエゴグラムの特徴は「N型」の傾向があると報告されている。今回、本学学生のエゴグラムの特徴について調査した結果、

1、自我状態の心的エネルギーの過剰と不足の傾向は、「AC」過剰（合わせすぎ）が1・2学年共に約40%弱、3学年で約25%と顕著であった。自我状態の過剰と不足に占める割合が1・2学年より3学年に少ないことは、3学年になると健全な一般人の思慮分別のある範囲へと心的エネルギーは移動していることがうかがわれた。

2、本学学生のエゴグラムの特徴は、「N型」ではなく、AC優位のエゴグラムで、子供的な自我状態（FC優位・AC優位・N型）が上位を占め、C主導の傾向であった。

I. はじめに

高い質をもった看護とは「対象の身体的・精神的・社会的ニードを的確に把握し、その時々適切な対応ができ、その人らしく生活できるように援助する」ことである。

看護者が看護の目的を実現でき、達成観をもてるようになっていくには、看護者自身のたゆまぬ知識・技術の学習と共に、病める人を慈しみ支える人間対人間の関わりを通じた人間性の深まり、成熟性への自己啓発が求められる。

著者が研究してきた看護者の成熟性のエゴグラムの特徴¹⁾²⁾は、成長・成熟していくに従って「N字型」から「への字型・ベル型」へと変化していくことが示唆されている。また、「N字型」の特徴の看護者の成長・成熟性を促していくには、「考える私:A」を高める必要がある³⁾。そのためには「価値づける私:CP」＜思考・判断の源である豊かな知識・ベテランの技術＞を高める必要があり、併せて、もてる力を自由に発揮できるように、民主的な職場環境が、専門職者の主体性の教育には重要であることが示唆された⁴⁾。

看護学生のエゴグラムの特徴については、3年課程では、「思いやる私:NP」と「合わせる私:AC」の2つを頂点とする「N型」⁵⁾⁶⁾で「NP」が「AC」より高い。看護大学系では「NP」を頂点とし、「AC」へと下がっていく「への字型」⁷⁾、あるいは「A」を頂点とする「ベル型」⁸⁾の傾向がある。いずれにおいても人間性の成長過程にあり、「思いやる私:NP」と「考える私:A」が育つことの必要性を指摘している。（「CP」は「価値づける私:CP」の略、同様に「NP」、「A」、「FC」、「AC」は、順に「思いやる私:NP」、「考える私:A」、「ありのままの私:FC」、「合わせる私:AC」と略す。）

今回は、エゴグラムからみた本学学生の特徴を知り、今後の教育に活かしたいと考え調査した結果、特徴が把握できたので報告する。

概念規定

交流分析では人の心の働き（自我状態・心のエネルギー）を、親的な自我状態: Parent（価値づける私:CP-Controlling Parent、思いやる私:NP-Nurturing Parent）、大人の自我状態:

Adult（考える私：A）、子どもの自我状態：Child（ありのままの私：FC-Free Child、合わせる私：AC-Adapted Child）に分け、今ここの自我状態（心のエネルギー）を自ら理解していく。

自我状態・心のエネルギーについて、ジョン・M・デユセイ⁹⁾は、いかなる人でも心的エネルギーは100%稼働しており、エネルギーの実際の増減は異なった自我状態へエネルギーが移動しているとみる。このP（‘CP’、‘NP’）、A、C（‘FC’、‘AC’）は個々バラバラに機能するのではなく、全体で反応し相互に対立すると同時に融和する。

池見は、人間味C、知性A、良心Pが渾然一体となって心身一如の人間として、本来性に沿った生き方へと展開する¹⁰⁾。「自然のいのちの一体感、人間同士の間では、お互いのいのちのいのちの触れ合いによって、生かされて生きている、自分のいのちへの気づきが、われわれの心を根底から安心させる¹¹⁾」と言い、自分を深く知り、自分の中の親的なP、大人のA、子どものCのバランスを整え、自己回復をはかり、自からよりよい生き方ができるようにすることが、真の自己実現へと向かうとみる。

これらP、A、Cの関係は、成長発達の過程で変化する。幼い子どもはC主導であるが、成長するにつれてAが、そしてPが発達し、バランスがとれるようになる。

女性の‘思いやる私：NP’の発達過程¹²⁾は、中学女子では‘NP’は低く（子どものCが優勢で）、高校女子では上昇し、成人女性では、他の自我状態より‘NP’は高値を示し、‘CP’の上昇もみられる。‘CP’、‘NP’、‘A’は成長発達に伴って成熟し、本能的・感情的なCをコントロールする。

人間は日々の生活体験を通して、性格や行動様式が形成され、物事への対処のしかたの基本（基本的構え）ができあがる。これには、1) 自・他肯定、2) 自己肯定・他者否定、3) 自己否定・他者肯定、4) 自・他否定の4つの構えがある。自・他肯定の構えは、人生早期の親子の触れ合いの中で育まれた自己信頼と他者信頼を土台と

して、主体的に創造的に生きる態度で、他者関係を大切に自他ともに成長していこうとする姿勢で、成熟性への人生態度といえる。このときの典型的エゴグラムは、‘NP’をピークとし‘AC’、へと下がっていく「への字型」である¹³⁾。一般に理想の看護者はやさしい思いやりのある看護者とされ、そのエゴグラムは「への字型」になると考えられる。

用語の定義

エゴグラムの形について、‘CP’を最高とするエゴグラムをCP優位とした。同様に‘NP’、‘A’、‘FC’、‘AC’を最高とするエゴグラムを各々NP優位、A優位、FC優位、AC優位とした。さらに‘NP’と‘AC’の2つを頂点とするエゴグラムが多くをみられ、この形をN型としてとりあげた。

N型については、NP優位群の中に、‘AC’低値の形と高値の形がみられた。前者の‘NP’高値のエゴグラムをNP優位とし、後者の‘NP’と‘AC’の2つを頂点とするエゴグラムをN型とした。またAC優位群の中に、‘NP’低値と高値の形がみられた。前者の‘AC’のみ高値のエゴグラムをAC優位とし、後者の‘AC’と‘NP’の2つを頂点とするエゴグラムをN型とした。

さらに、稲葉・丸山等¹⁴⁾の「看護学生の性格特性と自我状態の変化」のCAS（c a t t e l l 不安診断調査）とエゴグラムを使った報告で、‘高不安群のエゴグラムプロフィール’はN型であったとのことからN型をとりあげた。

II. 方 法

本学の1・2・3学年の学生に、質問紙エゴグラムを用いてアンケート調査を実施した（集合調査）。調査期間は平成7年7月7日から7月20日である。回答数は193人、内訳は1学年63人、2学年64人、3学年66人である。回答率100%。（表1）

エゴグラムは、「こころの自画像を描く」（アスノ経営管理社）を用いた（アンケート資料①）。これは50の質問からなり、‘CP’、‘NP’、‘A’、‘FC’、‘AC’の内容をランダムに含む。各質

こころの自画像を描く

自己洞察テスト E・G・O 設問 (設問に答える時間は、対象ごとに4～5分です)

ふだんの言葉や動作などを思い出しながらか、感じたまま、深く考えないで答えてみてください。
 答は「たいていする・しばしばする・ときにはする・めったにしない」の中から選び、該当する数字を空欄に記入します。
 生死にかかわらず、お父さんはからはじめ、50の質問に答え終わったら、次はお母さんには進み、わたしはが3番目になります。

3	たいていする
2	しばしばする
1	ときにはする
0	めったにしない

お名前 _____
 実施日 _____ 年 月 日

あなたから見た
お父さんは

あなたから見た
お母さんは

自己イメージ
わたしは

	(歳)	仕事は
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		

	(歳)	仕事は
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		

	(歳)	仕事は
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		

	(歳)	仕事は
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		

タテ列ごとに集計して下さい！
 集計の結果を折れ線グラフにします。

タテ列ごとに集計して下さい！
 集計の結果を折れ線グラフにします。

CP NP A FC AC

不足な状態	本来の働きの状態		過剰な状態
<p>価値づけできない私</p> <p>①話を鵜呑みにする ②決められない ③責任をとれない ④あいまいである ⑤だらしがない</p>	<p>CP 価値づける私</p> <p>①経験にもとづいて価値づける ②文化・伝統を守る ③規律・規範に従う ④教える ⑤責任をとる・とらせる</p>	<p>P</p> <p>受け容れ・与える役割</p>	<p>価値を押しつける私</p> <p>①決めつける ②押しつける ③干渉する ④こだわる ⑤独断する</p>
<p>相手を思いやれない私</p> <p>①人への配慮がない ②人への関心が薄い ③温かみがない ④愛情がもてない ⑤冷淡な態度をとる</p>	<p>NP 思いやる私</p> <p>①認める ②受け容れる ③信頼する ④育てる ⑤勇気づける</p>		<p>相手を甘えさせる私</p> <p>①過保護な ②甘やかす ③世話をしすぎる ④相手に尽くす ⑤過剰に期待する</p>
<p>考えようとしない私</p> <p>①場当たりである ②ずさんである ③首尾一貫していない ④情報判断が甘い ⑤データが読めない</p>	<p>A 考える私</p> <p>①現実に適応する ②筋道をたてて考える ③情報を取捨選択する ④事実に基づいて判断する ⑤データに基づいて評価する</p>	<p>A</p> <p>判・断統し合・す調る整役し割</p>	<p>理詰め私</p> <p>①割り切りすぎる ②味もそっけも無い ③心情を無視する ④データを過信する ⑤打算的である(勘定高い)</p>
<p>楽しめない私</p> <p>①感じたことの表出が少ない ②表情が固い ③陰気くさい ④萎縮している ⑤気力が出せない</p>	<p>FC ありのままの私</p> <p>①感じたまま表現する ②のびのびしている ③創造力がある ④直感する ⑤やる気がある</p>		<p>C</p> <p>感じ・求める役割</p>
<p>合わせられない私</p> <p>①引き込み思案になる ②自分から働きかけられない ③聞かれないと応えられない ④口数が少ない ⑤存在感がうすい</p>	<p>AC 合わせている私</p> <p>①協調する ②協力する ③指示に従う ④従順である ⑤人当たりがよい</p>	<p>合わせすぎる私</p> <p>①すぐ妥協する ②よく思われたがる ③依存する ④遠慮する ⑤つまらないことを気にする</p>	

表1 学年別自我状態と優位エゴグラムの割合

		人	%	CP	NP	A	FC	AC	心エネルギー
6 回 生 ： 一 年	C P 優位	5	7.9	25.6	20.2	21.7	18.2	20.8	106.5
	N P 優位	8	12.7	20.4	22.8	18.6	20.2	18.0	100.0
	A 優位	3	4.8	21.3	22.7	26.0	22.0	24.7	116.7
	F C 優位	23	36.5	19.5	18.9	18.1	25.2	19.5	101.3
	A C 優位	12	19.0	19.5	17.1	17.4	17.6	23.8	95.4
	N 型	12	19.0	18.8	23.7	18.0	18.5	25.6	104.6
	計	n= 63	100.0	20.9	20.9	20.0	20.3	22.1	104.2
5 回 生 ： 二 年	C P 優位	4	6.3	26.5	19.0	23.0	22.0	19.8	110.3
	N P 優位	7	10.9	18.4	24.9	17.1	21.6	17.3	99.3
	A 優位	7	10.9	20.1	18.7	23.1	17.9	20.7	100.6
	F C 優位	13	20.3	19.3	18.7	19.2	25.1	19.1	101.4
	A C 優位	19	29.7	17.6	17.8	17.8	18.5	24.1	95.7
	N 型	14	21.9	19.4	23.5	19.3	18.2	23.6	104.1
	計	n= 64	100.0	20.2	20.4	19.9	20.5	20.8	101.9
4 回 生 ： 三 年	C P 優位	6	9.1	23.3	18.5	21.4	21.6	19.4	104.2
	N P 優位	14	21.2	21.1	26.1	21.8	23.3	23.5	115.8
	A 優位	13	19.7	18.5	18.4	23.4	20.4	19.8	100.5
	F C 優位	15	22.7	19.1	18.7	19.4	24.0	18.2	99.4
	A C 優位	7	10.6	19.0	19.1	19.1	18.1	26.1	101.4
	N 型	11	16.7	15.8	21.8	17.4	18.7	24.3	98.0
	計	n= 66	100.0	19.5	20.4	20.4	21.0	21.9	103.2
全 学 年	n=193	100.0	20.2	20.6	20.1	20.6	21.6	103.1	

問項目については、「はい」「いつも」は3点、「しばしば」は2点、「ときには」は1点、「いいえ」「めったに」は0点を記入し、「CP」、「NP」、「A」、「FC」、「AC」の点数を集計した。次に、横軸に各自我状態を、縦軸に心のエネルギー（0～30点）をとり、エゴグラムを作成した。学年におけるエゴグラムは平均得点を使用した。自我状態の過剰と不足の学生についても教育的配慮を要すると考え、自我状態の心的エネルギーのバランスからとらえた。

5つの自我状態の心の働きについては、アンケート資料②に示した。自由に柔軟に働いているバランスのとれた「本来の働き」（中央の記述）と、「過剰」な状態（右端の記述）、逆に「不

足」な状態（左端に記述）がある。そこで自我状態の過剰と不足をみるために、最高値30点を100%とし、90%（27点）以上を過剰、中央値50%（15点）未満を不足と設定した。但し、「合わせる私：AC」については、次の理由により基準を変えた。「AC」過剰の心的エネルギーの得点を90%より抑えた80%（24点）とし、不足を30%未満（9点以下）として設定した。

理由は、「AC」本来の働きはく相手と協調・協力する、相手の指示に従う>といった内容である。場に臨んで、相互にかかわり合いをもつ場合の自律した対応は、「AC」本来の働きと同時に、「CP」「NP」「A」の自我状態が連動して働いている。5つの自我状態が十分に機能していれば、

‘合わせる私:AC’の心的エネルギーは自と適当な位置を占め、中央値15よりやや低めとなる。また「への字型」—自・他肯定の基本的構え¹⁵⁾—の典型的なエゴグラムは、親的なPと大人のAも高く、‘FC’もある程度高く‘AC’の本来的位置は中央より低めとなる。

Ⅲ. 結 果

1. 自我状態の学年別分布 (図1)

1) ‘価値づける私:CP’の頻度の高いところは、1学年では高めの19~24に山を形成し、13~14にも小さな分布の山がある。2学年では17~18で、3学年では19~22で、2・3学年は14~26の全体に分布している。

2) ‘思いやる私:NP’の頻度の高いところは、1学年では18と23~25と2つの山があり、2学年は19~21、3学年は20~21である。全体をみると1・2・3学年とも11~29に分布している。

3) ‘考える私:A’の頻度の高いところは、1学年は15と18で、2学年は17、3学年は19~22で高学年に進むに従って上昇傾向を示す。全体をみると1学年は8~28、2学年は12~30、3学年は10~27に分布している。

4) ‘ありのままの私:FC’の頻度の高いところは1学年では21とやや高めだが、9~30の範囲

で全体的に分布している。2学年の高頻度は24で、14~25の範囲に分布し、3学年は19~21と23~24の2つの山を形成している。

5) ‘合わせる私:AC’の頻度の高いところは、1学年では23~25で、この前後の21~27にかけて高めの山を形成し、2学年では23~24が高めの山で、16~27範囲に分布している。3学年では19と22がやや高めの山で、15~27の範囲に平均した分布を示している。

2. 自我状態の過剰と不足の学年別分布 (表2 1) 2) 3))

1) ‘CP’の過剰と不足について:

価値を押しつける私 (過剰) 27点以上は、1学年では1人 (1.6%)、2学年3人 (4.7%)、3学年0人 (0) で、1・2学年に数%いる。

価値づけできない私 (不足) 14点以下は、1学年11人 (17.5%)、2学年6人 (9.4%)、3学年8人 (12.1%) で、各学年約10~18%である。

2) ‘NP’の過剰と不足について: 相手を甘えさせる私 (過剰) 27点以上は、1学年では2人 (3.2%)、2学年5人 (7.8%)、3学年1人 (1.5%) である。

相手を思いやれない私 (不足) 14点以下は、1学年8人 (12.7%)、2学年7人 (10.9%)、3学年5人 (7.6%) で、各学年約10%前後であ

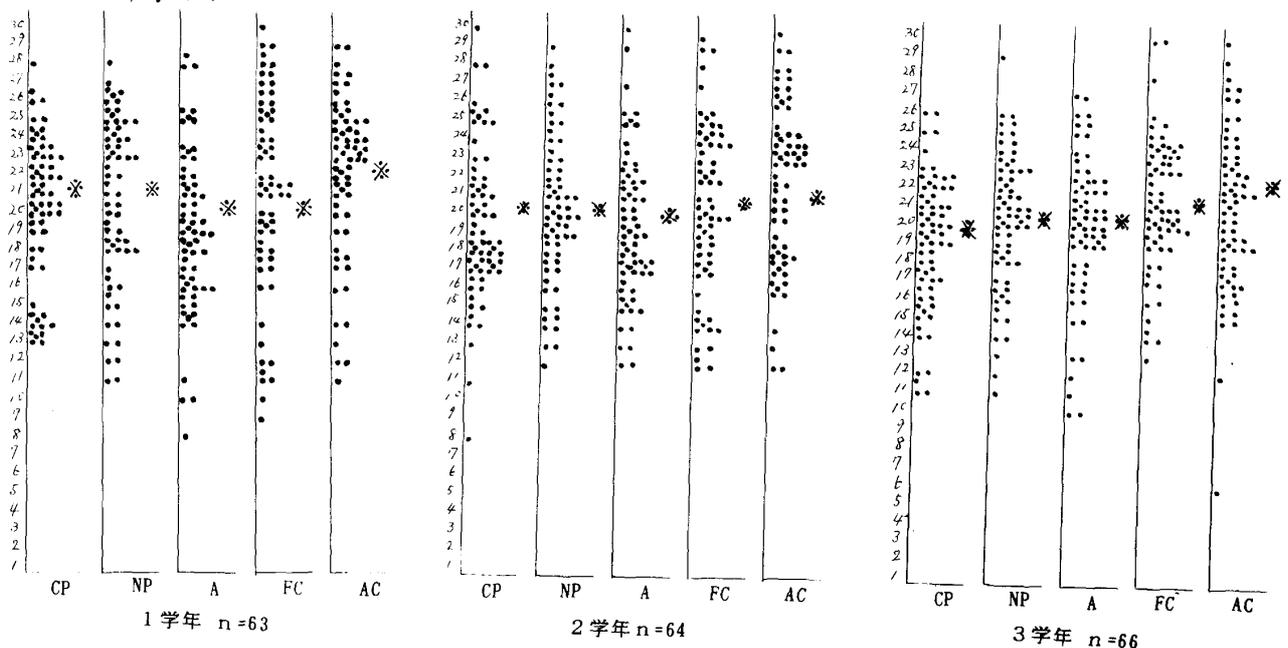


図1 自我状態の学年別分布

表 2 自我状態の心的エネルギー別分布

表 2 1) 1 学年

n=63 (100%) H.7.7.18

心のエネルギー		CP		NP		A		FC		AC	
点	%	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
30	100	0	0	0	0	0	0	1	1.6	0	0
27~29	90以上<100	1	1.6	2	3.2	3	4.8	9	14.3	7	11.1
24~26	80以上<90	10	15.9	18	28.6	5	7.9	12	19.1	18	23.6
15~23	50以上<80	41	65.1	35	55.6	46	73	32	50.8	32	50.8
10~14	30<50以下	11	17.5	8	12.7	8	12.7	8	12.7	6	9.5
7~9	20<30以下	0	0	0	0	1	1.6	1	1.6	0	0
0~6	20以下	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	63	100.1	63	100.1	63	100	63	100.1	63	100

表 2 2) 2 学年

n=64 (100%) H.7.7.20

心のエネルギー		CP		NP		A		FC		AC	
点	%	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
30	100	1	1.6	0	0	1	1.6	0	0	1	1.6
27~29	90以上<100	2	3.1	5	7.8	2	3.1	5	7.8	8	12.5
24~26	80以上<90	8	12.5	9	14.1	6	9.4	14	21.9	14	21.9
15~23	50以上<80	47	73.4	43	67.2	49	76.6	34	53.1	37	57.8
10~14	30<50以下	5	7.8	7	10.9	6	9.4	11	17.2	4	6.3
7~9	20<30以下	1	1.6	0	0	0	0	0	0	0	0
0~6	20以下	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	64	100	64	100	64	100.1	64	100	64	100.1

表 2 3) 3 学年

n=66 (100%) H.7.7.7

心のエネルギー		CP		NP		A		FC		AC	
点	%	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
30	100	0	0	0	0	0	0	2	3	1	1.5
27~29	90以上<100	0	0	1	1.5	2	3	1	1.5	6	9.1
24~26	80以上<90	5	7.6	10	15.2	8	12.1	15	22.7	9	13.6
15~23	50以上<80	53	80.3	50	75.8	50	75.8	43	65.2	45	72.7
10~14	30<50以下	8	12.1	5	7.6	6	9.1	4	6.1	1	1.5
7~9	20<30以下	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0~6	20以下	0	0	0	0	0	0	1	1.5	1	1.5
	計	66	100	66	100	66	100	66	100	66	100

る。

3) 'A'の過剰と不足について:

理詰め私(過剰) 27点以上は、1学年では3人(4.8%)、2学年3人(4.7%)、3学年2人(3.0%)と各学年に約5%以下いる。考えようとしな私(不足) 14点以下は、1学年9人(14.3%)、2学年6人(9.4%)、3学年6人(9.1%)で約19~15%ある。

4) 'FC'の過剰と不足について:

わがまま私(過剰) 27点以上は、1学年では10人(15.9%)、2学年5人(7.8%)、3学年3人(4.5%)である。

楽しまない私(不足) 14点以下は、1学年9人(14.3%)、2学年11人(17.2%)、3学年5人(7.6%)である。

5) 'AC'の過剰と不足について:

合わせすぎる私(過剰) 24点以上は、1学年では25人(39.7%)、2学年23人(36.0%)、3学年16人(24.2%)である。

不足(合わせられない私) 9点以下は、1学年0人(0)、2学年0人(0)、3学年1人(1.5%)である。

3. エゴグラムからみた本学学生の特徴

1) 全学年と1・2・3学年の特徴(図2、表1)

1学年は、最高値は、'合わせる私:AC' 22.1で、2位と3位は'価値づける私:CP'と'思いやる私:NP'が同値の20.9である。4位は'ありのままの私:FC' 20.3、最低値は'考える私:A' 20.2で、'AC'を頂点とするAC優位のエゴグラムである。

2学年は、最高値は'AC' 20.8で、'FC' 20.5、'NP' 20.4、'CP' 20.2、'A' 19.9である。全体的に約20点前後のゆるやかな、AC優位のエゴグラムである。

3学年は、最高値は、'AC' 21.9、次は'FC' 21.0、3位と4位は'NP'と'A'が同値の20.4で、5位は'CP' 19.5である。AC優位のエゴグラムである。

全学年のエゴグラムは、最高値は'AC' 21.9で、次は'NP' 20.6、3位は'FC' 20.2、4位は'CP' 20.1で、5位は'A' 19.9である。全体をみ

ると'AC'を頂点とし、'NP'がやや高く、'CP'と'A'がやや低いAC優位のエゴグラムである。

2) CP優位エゴグラム(図3、表1):

各学年の学生の割合は、1学年7.9%、2学年6.3%、3学年9.1%と、いずれも10%以下である。

1学年は、最高値は'CP' 25.6、次は'A' 21.7で、3位は'AC' 20.8、4位は'NP' 20.2で、5位は'FC' 18.2である。

2学年は、最高値は'CP' 26.5で、次は'A' 23.0、3位は'FC' 22.0、4位は'AC' 19.8、5位は'NP' 19.0である。

3学年は、最高値は'CP' 23.3で、次は'FC' 21.6、3位は'A' 21.4、4位は'AC' 19.4、'NP'は最低値の18.5である。

1~3学年のCP優位エゴグラムの学生の特徴は、'価値づける私:CP'が最高であるのに対し、'思いやる私:NP'が逆に著しく低い。1学年では、'ありのままの私:FC'も低く自分を抑え、'合わせる私:AC'は高い。

2~3学年は似たエゴグラムで、'価値づける私:CP'に次いで'考える私:A'と'ありのままの私:FC'が高く、'思いやる私:NP'と'合わせる私:AC'は共に低い。

3) NP優位エゴグラム(図4、表1):

各学年の学生の割合は、1学年12.7%、2学年10.9%で約10%、3学年21.2%と約2倍である。

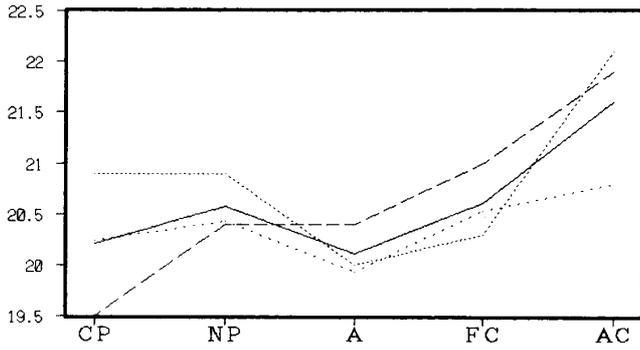
1学年は、最高値は'NP' 22.8で、次は'CP' 20.4、3位は'FC' 20.2、4位は'A' 18.6、5位は'AC' 18.0である。

2学年は、最高値は'NP' 24.9で、次は'FC' 21.6、3位は'CP' 18.4、4位は'AC' 17.3で、5位は'A' 17.1である。

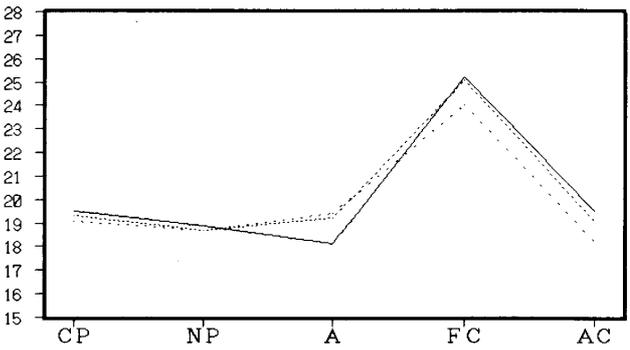
3学年は、最高値は'NP' 26.1で、次は'AC' 23.5、3位は'FC' 23.3、4位は'A' 21.8、5位は'CP' 21.1である。1~3学年共に'NP'と'FC'が高く'A'は低い。

4) A優位エゴグラム(図5、表1):

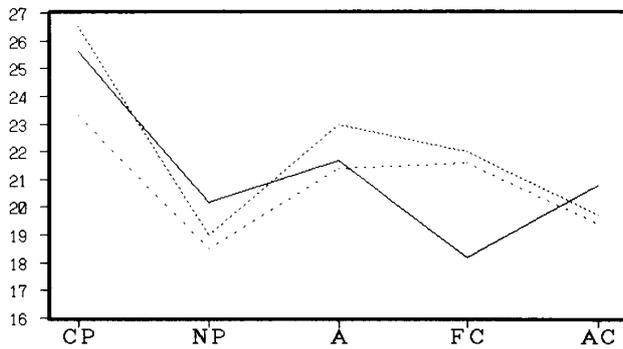
各学年の学生の割合は、1学年4.8%、2学年10.9%、3学年19.7%と学年が進むに伴い2倍・3倍と多くなる。



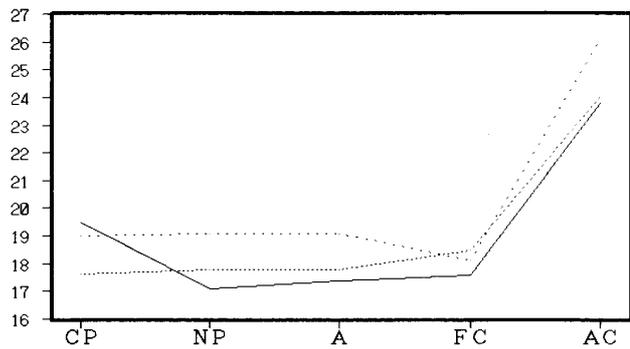
— 全学年 …… 1年 …… 2年 - - 3年
図2 自我状態：1年、2年、3年と全学年



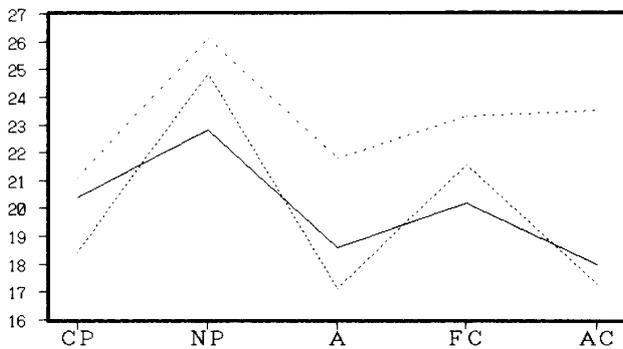
— 1年 …… 2年 …… 3年
図6 FC優位：1年、2年、3年



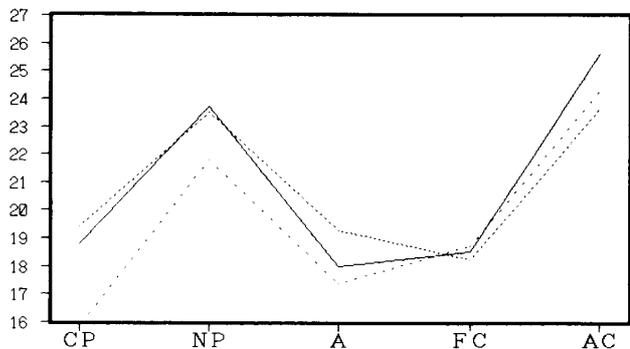
— 1年 …… 2年 …… 3年
図3 CP優位：1年、2年、3年



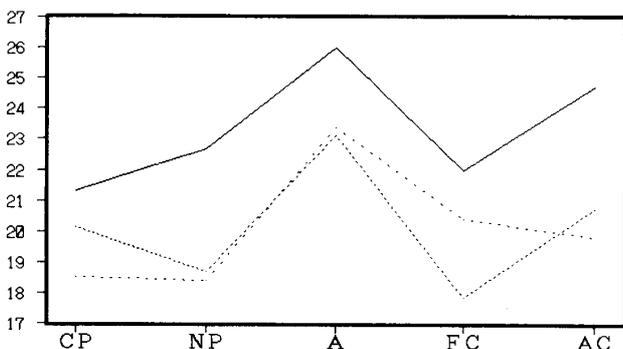
— 1年 …… 2年 …… 3年
図7 AC優位：1年、2年、3年



— 1年 …… 2年 …… 3年
図4 NP優位：1年、2年、3年



— 1年 …… 2年 …… 3年
図8 N型：1年、2年、3年



— 1年 …… 2年 …… 3年
図5 A優位：1年、2年、3年

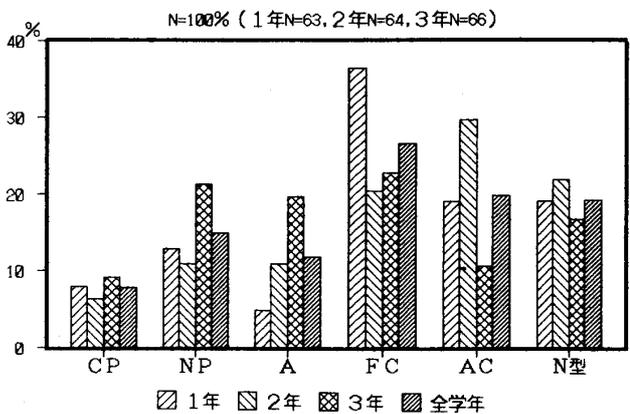


図9 優位エゴグラム：学年比較

1 学年は、最高値は‘A’ 26.0 で、次は‘AC’ 24.7、3 位は‘NP’ 22.7、4 位は‘FC’ 22.0、5 位は‘CP’ 21.3 である。

2 学年は、最高値は‘A’ 23.1、次は‘AC’ 20.7、3 位は‘CP’ 20.1、4 位は‘NP’ 18.7 で、5 位は‘FC’ 17.9 である。

3 学年は、最高値は‘A’ 23.4 で、次は‘FC’ 20.4、3 位は‘AC’ 19.8、4 位は‘CP’ 18.5、5 位は‘NP’ 18.4 である。

1～3 学年を通して‘考える私:A’が最も高く、‘思いやる私:NP’は‘合わせる私:AC’より3 位以下と低い。

5) FC 優位エゴグラム (図6、表1):

各学年の学生の割合は、1 学年 36.5%、2 学年 20.3%、3 学年 22.7%で、約 20～37%と他の優位エゴグラムにくらべ最も多い。

1・2・3 学年共に殆ど似た形のエゴグラムでまた心のエネルギーの高さも似ている。1～3 学年共に、‘FC’が 25.2～24.0 を頂点とし、他の自我状態は水平で 19.5～18.2 と明らかに低い。

6) AC 優位エゴグラム (図7、表1):

各学年の学生の割合は、1 学年 19.0%、2 学年 29.7%で、3 学年 10.6%である。1～2 学年 20～30%であるのにくらべ、3 学年は約 10%と少ない。

1 学年は、最高値は‘AC’ 23.8 で、次は‘CP’ 19.5 で、他の自我状態は最低値の 17.1～17.6 代である。

2 学年と 3 学年は、‘AC’が 24.1～26.1 で最も高く、‘FC’は約 18 と著しく低く、‘CP’と‘NP’と‘A’は平坦で、2 学年は 17 代、3 学年は約 19 代で、エゴグラムの形も心的エネルギーの高さも似ている。

1～3 学年共に、‘AC’が 23.8～26.1 で最も高く、他の自我状態は 19.5～17.1 と顕著に低い。

7) N型エゴグラム (図8、表1):

各学年の学生の割合は、1 学年 19.0%、2 学年 21.9%で、3 学年 16.7%で、1～3 学年を通して約 16～22%である。

1 学年は、‘AC’ 25.6 と‘NP’ 23.7 とが高く、他は約 18 代と低いN型である。

2 学年は、‘AC’ 23.6 と‘NP’ 23.5 が高く、他

の自は我状態は約 18～19 代と低くN型である。

3 学年は、‘AC’ 24.3 と‘NP’ 21.8 が高く、‘A’と‘FC’は約 17～18 代と低く、‘CP’は 15.8 と最も低いN型である。

1～3 学年に共通に、‘合わせる私:AC’と‘思いやる私:NP’の2つを頂点とし、‘AC’が‘NP’より高く、‘CP’、‘A’、‘FC’が顕著に低いN型である。2 学年は‘A’より‘FC’が低く、1・3 学年では‘FC’より‘A’が低いN型である。

4. 学生数によるエゴグラムの比較

(図9、表1):

1) 各学年におけるエゴグラムの比較:

1 学年の最多は、FC 優位が 36.5% (23 人) を占める。次は AC 優位と N型が同値の 19.0% (12 人) で、以下 NP 優位 12.8% (8 人)、CP 優位 7.9% (5 人)、A 優位 4.8% (3 人) と順に少なくなっている。

2 学年の最多は、AC 優位 29.7% (19 人) で、N型 21.9% (14 人)、FC 優位 20.3% (13 人)、NP 優位と A 優位は同値で 10.9% (7 人)、CP 優位 9.1% (6 人) である。

3 学年の最多は、FC 優位 22.7% (15 人) で、NP 優位 21.2% (14 人)、A 優位 19.7% (13 人)、N型 16.7% (11 人)、CP 優位 9.1% (6 人) である。

2) 各優位エゴグラムの学年比較:

CP 優位と NP 優位エゴグラムの最多は 3 学年である。A 優位エゴグラムは、学年が進むに従って顕著に増加し、3 学年が最も多い。FC 優位エゴグラムは、1 学年が顕著に多く、AC 優位エゴグラムは 2 学年が顕著に多い。N型は、顕著な差ではないが多い順に 2 学年、1 学年、3 学年である。AC 優位と N型は、3 学年が最も少ない。

3) 全学年におけるエゴグラムの比較:

FC 優位 (26.4%) が最多で、次ぎは AC 優位 (19.7%) と N型 (19.2%) がほぼ同値で、4 位は NP 優位、5 位は A 優位、6 位は CP 優位である。子供の自我状態の高い FC 優位と AC 優位と N型の3者を加えると約 65%で全学生数の半数を超える。

IV. 考 察

1. 自我状態の過剰と不足について：表2 1) 2) 3)、

‘CP’ 過剰の ‘価値を押しつける私’ は1・2学年にのみ数%みられる。また‘CP’ 不足の ‘価値づけできない私’ は、1～3学年を通して約10～20%を占めている。価値づけできないことは他方では合わせすぎ(‘AC’)の傾向になりやすい。

‘NP’ 過剰の ‘相手を甘えさせる私’ は1～3学年を通して約数%みられる。‘NP’ 不足の ‘相手を思いやれない私’ は、学年が進むに従って減少しているものの、約10%前後を占める。思いやれることは、相手をかけがえのない人として愛し慈しみ、尊重するという人間形成の根幹にかかわる。看護を学ぶ者の人格形成上の中核的課題でもある。

‘A’ 過剰の ‘理詰め私’ は、1～3学年を通して数%みられる。過剰な人については個々人のエゴグラム全体のバランスをみる必要がある。‘A’ 不足の ‘考えようとしぬ私’ は、事実を確かめる、筋道をたてて考える、現実に対応する、全体をみわたして判断するといった心のはたらきは低く、1～3学年を通して約10%前後を占める。看護過程を理解し、展開できる上で要求される客観的・科学的思考と洞察力、調整し統合する力を備える上で問題となる。

‘FC’ 過剰の ‘わがままな私’ は、1学年が最も多く約16%で、学年が進むに従って減少し10%以下である。相手のことより自分の関心・感情を中心に行動する傾向が強い。他者を思いやる看護者としての基本姿勢に欠ける。‘FC’ 不足の ‘楽しめない私’ は3学年が約8%と少ないが、1・2学年は約20%弱で、自分を抑制し萎縮した状態にある。多感な青年期の人格形成<自己形成から自己の確立>のこの時期に感情が固く、気力が出せない状況は問題と思われる。

‘AC’ 過剰の ‘合わせすぎの状態’ は1・2学年は約40%弱、3学年は約25%で過剰な自我状態の中でも最多である。「合わせすぎ」は他方では価値づけできない、自分を抑え込む状況を包含している。‘AC’ 不足の ‘合わせられない私’ は、1・2学年にはいないものの、3学年に1人

いる。3年次になっても、引っ込み思案、自分から働きかけない傾向がうかがえ、自己教育力や職業的適応を育む上で問題である。

自我状態の過剰と不足の人数は、3学年になると減少していることから、自我状態の心的エネルギーは移動しており、人間的な成長が促されていることがうかがわれる。川端等⁶⁾ (第1報)は、エゴグラム上の自我状態の過多過少について、健全な一般人の思慮分別のある行動を「逸脱する行動となることであり、特に過少であることは、全人格にかかわる問題となる」と述べ、さらに‘CP’ と‘FC’ の過少のひとつには、個別指導と共に十分な観察が必要であると述べている。

今後共調査を重ね、看護者を目指して入学してきた学生個々について、①入学時点、②学年別の成長傾向、③自我状態の過剰と不足に関する問題について具体的に分析し、教育に活かしていく必要がある。

2. エゴグラムからみた学生の特徴：図2

1) 全学年と1・2・3学年の特徴

(1) 全学年の特徴：最高が‘AC’約22点、他は約20点で、AC優位のエゴグラムである。

NP+AC>CP+FCであるところから、自分軸(自分中心)よりも他人軸(他者中心)の傾向がある。このことは、他者を思いやる・協調する心のエネルギーが高い一方、自分に責任をもつ、主体的・積極的に関心をもって取り組む心のエネルギーは低い。

(2) 1学年の特徴：AC優位エゴグラムで‘合わせる私:AC’を最高に発揮している。事実を確かめ客観的に‘考える私:A’は最も弱い。受け容れ・与える親的な役割(‘CP’と‘NP’)はやや高め、自分らしさは抑え気味である。

(3) 2学年の特徴：5つの自我状態が約20点代の範囲にある。その中で‘合わせる私:AC’が高めで‘考える私:A’が最低値のAC優位エゴグラムである。

(4) 3学年の特徴：AC優位エゴグラムで、‘AC’が最も高く、‘CP’が最も低い。‘A’と‘NP’は同値で3番目と低い。3学年の‘A’は、1・2・

3 学年の中で最も高いが 'CP' は最も低い。3 学年の '考える私:A' が高くなっているのは、2 学年後期から 3 学年前期にかけて看護実習が連続して組まれており、学生は自分自身へ熟慮した対応を求め続けるところから、'考える私:A'（現状を把握し、全体を統合し洞察する：智）の自我状態が常に働き、思考力・洞察力が育つことが促がされるものとうかがわれる。しかし、'CP' が最低値で 'AC' が最高値であることから、自信がなく、'合わせる私:AC' を最高に発揮して対応している様子がうかがわれる。

看護基礎教育では、学習した「専門知識」と「看とりの慈しむところ」が、実践の体験を通して、価値感情として生まれ、学生の看護観の形成を促すものとする。自我状態の '思いやる私:NP' と '考える私:A' が高まるには、「自己信頼」感を育て、主体的に積極的に行動し、結果に責任のとれる対応のできる力量を育てることが重要となる。

専門職者では、知識・価値観・看護観に支えられた '価値づける私:CP' の心のエネルギーがある程度高く機能している必要がある。この CP を基に、'考える私:A'（現状を把握し、全体を統合し洞察する智）が十分に機能していると考えられる。このように心が機能するためには、過度な緊張感の少ない民主的な学習環境を創る努力が必要である。相互に尊重し合う能力、自分らしさの尊重と他者への配慮、聴く力と主張する力、そして応える力が要る。そこには、相手の素晴らしさやこころの痛みを配慮し、そして必要なことを直接相手に伝え合える勇気がいる。生き生きとしたいのちといのちの交流があって初めて、人間味を味わうことが可能となる。看護のこころは、その深みの次元にあって、より豊かなこころが育まれると考える。QOL を目指す保健・医療・福祉の思想は、専門職者としての理念・思想・使命・看護観として核心を明確にして育てる必要がある。

2) CP 優位エゴグラム (図 3、表 1):

各学年に占める学生の割合は、10%以下である。

1~3 学年の CP 優位エゴグラムの学生の特

徴は、'価値づける私:CP' が最高であるのに対し、'思いやる私:NP' が著しく低い。

1 学年は、'FC' も低く、'AC' が高いことから自分を抑え、自分のあるべき方向へとどんどんすすめる強さ 'CP' がある一方、やったあとで他人の思惑を大変気にする傾向がうかがえる。

2~3 学年は似たエゴグラムで、'価値づける私:CP' に次いで '考える私:A' と 'ありのままの私:FC' が高く、'思いやる私:NP' と '合わせる私:AC' は共に低い。

自分の価値観でおし進め、他者への思いやりも協調性も低く、他者より自分が中心の対応をする傾向がある。

佐藤¹⁷⁾は、演習事例を使った研究で、自我状態によるコミュニケーションのあり方を検討し、患者を理解し、看護を展開する対応は「A 型が最も好ましく、CP 型は最も好ましくない」と述べているように、CP 優位の学生は今後の変化が大いに期待される。

3) NP 優位エゴグラム (図 4、表 1):

各学年に占める学生の割合は、1・2 学年は約 10%、3 学年は約 20%と約 2 倍である。

1~3 学年共に '思いやる私:NP' と 'ありのままの私:FC' が高く、やさしさと明るさがありパワーもある。'価値づける私:CP' と '考える私:A' は低い。中でも 3 学年のエゴグラムは、1・2 学年より心的エネルギーが全体に高い。藤井¹⁸⁾は、精神科実習の指導を通して、'NP' の高い学生は「関わりが同情的、過保護的になり、患者との距離をとれない。気持ちばかりが先行する。よい関係でないと不安……患者の依存を強める、独立心をなくする。」と述べている。事実を確かめて、全体をみて考え、判断する 'A' が 4 位以下と低いことから、本来の優しさが十分に生かされにくい傾向にある。1・2 学年の 'A' は 'CP' より低い、3 学年の 'A' は 'CP' より高く、1・2 学年よりも 'A' が高いことから、5 つの自我状態はより有効に働きつつあるようにうかがわれる。

4) A 優位エゴグラム (図 5、表 1):

各学年に占める学生の割合は、1 学年約 5% で学年が進むに伴い 2 倍・3 倍と多くなる。

1～3学年のA優位エゴグラムの特徴は、‘考える私:A’が最も高く、‘思いやる私:NP’が‘合わせる私:AC’より3位以下と低い。このことは、目先のことにとらわれて熱中する一方で、他者の思惑を気にする傾向がうかがえる。現実的・合理的な‘考える私:A’は高いが、親的な与える役割Pよりも、青年期の特徴である子どもの求める役割C（相手に認められたい）が強い傾向がうかがえる。‘考える私:A’の自我状態のはたらきは、理論的思考、客観的判断力に影響する。情報を取捨選択する、データに基づいて評価する、事実にもとづいてフィードバックしながら、問題解決する思考力である。また個と集団の関係<患者・家族、看護チーム>を把握し問題解決を目指し目標管理している状態は、観察し判断し、調整し、統合する大人の役割Aが高度に働いている。

看護専門職者に要求される問題解決能力を育てる上で、5つの自我状態がバランスのとれた山形で‘A’が高まっていくことは看護者の成長過程において重要な課題である。

5) FC優位エゴグラム（図6、表1）:

各学年に占める学生の割合は、1・2・3学年に約20～37%と他の優位エゴグラムにくらべ最も多い。

1～3学年のエゴグラムは‘ありのままの私:FC’を頂点とし、他の自我状態は水平で低く、形と心的エネルギーの高さが似ている。

‘FC’が際だって高く天真爛漫、自分の感情のまま行動する。他者より自分の関心・思いを優先させる傾向が強い。

看護の中核である他者への配慮や熟慮すること、問題解決思考ならびに計画的に実施することに関する学習への取り組みがなかなか困難な傾向にある。藤井¹⁹⁾は、前掲の精神科実習指導を通して、‘FC’の強い学生は、「衝動的言葉を発し、患者に精神的負荷を与えた」、「自己の感情:C (FC,AC) に気づくことによって患者との距離がとれるようになった」と述べている。

木村等²⁰⁾は、3年次の実習評価（外科系、大学:3・4年次実習）ではFC優位型が「知識」、「態度」、「総合点」で有意に低かったと述べ、

「知識」では“受持ち患者の理解”や“看護計画の作成”等について、適切な情報把握に基づいた看護過程による展開ができていないかを評価するため、どちらかといえば感覚的に処理する傾向があり、落ち着いて論理的に考えることを得意としないFC優位型が低く評価され、「態度」の評価も“協調性”、“努力”を評価項目としてみるため、FC優位型は明るい自由奔放、直感的、本能的な感情、気分の変化、自己中心的側面がみられることから低く評価されたものと思われると述べている。また川端等²¹⁾は、実習成績との関係で、‘FC’と負の相関の実習科に産科をあげ「患者の心理的背景から、患者は不安や悩みを多く抱えている。‘FC’のありのままの自分、衝動的・直感的、子供っぽさの開放性が強く表れると実習成績が悪い。看護学生にも大人の優しさを求めている」と述べている。実習科の看護上のニーズの特徴は、関わる学生の自我状態との関係からみると人間的成長を促す学習課題となる。

6) AC優位エゴグラム（図7、表1）:

各学年に占める学生の割合は、1～2学年20～30%で、3学年約10%と学年が進むと明らかに少ない。

1～3学年共に‘合わせる私:AC’が23.8～26.1で最も高く、他の自我状態は19.5～17.1と顕著に低い。2・3学年のエゴグラムは形も心的エネルギーの高さも似ている。1～3学年共に、他者を気にして合わせすぎの傾向が強く、反面自分らしさの‘FC’は強く抑え込んでいる。自分に肯定的構えがとりにくく、他者を思いやり認める心のはたらきも弱い。自・他否定の基本的構えの傾向がうかがえる。1・2学年より3学年の割合が少ないことは、自・他否定の最悪の自我状態のバランスからは、脱していくことがうかがわれる。

7) N型エゴグラム（図8、表1）:

各学年に占める学生の割合は約20%前後である。1～3学年共通に、‘思いやる私:NP’と‘合わせる私:AC’の2つを頂点とし、‘CP’と‘A’と‘FC’を低値とするN型である。本学のN型は‘NP’より‘AC’が高い特徴がある。

‘思いやる私:NP’ と ‘合わせる私:AC’ は、自分よりは他人を優先する行動傾向（他人軸）で、‘価値づける私:CP’ と ‘ありのままの私:FC’ は、他人よりは自分に目が向けられ、自分が中心の行動傾向（自分軸）である。

各学年の「他人軸」と「自分軸」をみると、1学年はNP+AC (49.3) > CP+FC (37.3)、2学年は、NP+AC (47.1) > CP+FC (37.6)、3学年は、NP+AC (46.1) > CP+FC (34.5) で共に自分よりは他人を優先する。自分が生き生きと主体に行動し責任をとるよりは、他人を優先し、従い、あてにする傾向がうかがわれる。

N型エゴグラムの未熟さは、学生の成長の可能性でもある。しかし、高度医療の現場を実習場とし、病める人を目の当たりにしたとき、学んだ知識・理想を看護行為として現実化し、行動に移す段階で、自と緊張と不安を伴う。

看護を実践している時の看護者（一般）の自己状態のはたらきを考えてみると、専門職者としての知識と価値判断（‘A’に連動した‘CP’）がはたらき、自然な自分らしさ‘FC’がはたらいてパワーがある。他者への思いやり‘NP’の温かさや協調する‘AC’がはたらき、そして、事実を確かめ全体をみわたしてバランスをとる‘A’が高くはたらく。このような自己状態は、N型とは異なり、成熟した・安定したエゴグラムで「への字型」あるいは「ベル型」となる。

稲葉・丸山等²²⁾は、前掲のCASとエゴグラムを使った看護学生の調査で、「高不安群のエゴグラムプロフィール’がいずれもN型であった」と述べている。また著者の報告した²³⁾前掲の看護者のエゴグラムによるの発達傾向も、未熟な段階では「N型」であった。このようなN型エゴグラムは、自分軸より他人軸で行動する傾向があることから、自己否定・他者肯定の基本的構えの傾向にある。自分を抑えてでも他の人との関係を良くしようという‘思いやる私:NP’や‘合わせる私:AC’の機能が表面にでるのが特徴で、内部に矛盾が蓄積されやすい。

3. 学生数による優位エゴグラムの比較 (図9):

学生数の割合からみると、FC優位、AC優位とN型が上位を占め、これらは子供の自己状態Cである。この3者を合わせると、1・2学年では約70%、3学年では約50%と約20%少ない。

全学年をみると、上位のFC優位(26.4%)、AC優位(19.7%)とN型(19.2%)の合計は約65%で、子供の自己状態Cが主導の傾向にある。親的な自己状態P(CP優位とNP優位)の傾向をみると、1・2学年は約20%、3学年は30%強と3学年は10%多い。A優位は、学年が進むに従って顕著に増加し、3学年は1学年の約3倍、2学年の約2倍と著しい増加がみられる。

1・2学年に比し、3学年になると子供的な自己状態Cの人数は減少し、親的な自己状態Pと大人の自己状態Aの人数が増加する。

このことは、学生が青年期の成長発達の時期にあること、短期大学での3年間の看護学教育と学生生活等による影響と考えられる。また今回の研究の調査時期が学年の前期であったことから、2学年では一般教育と看護学系の基礎看護学と概論と保健の科目が中心で、短期間の基礎実習の他は、学習形態は主に学内である。3学年では専門科目の授業と実習という、体験に基づく深化の学習による影響が大きいと考えられる。

看護学生は、専門職者になっていく基礎を学ぶ過程にあるが、同時に、一般社会人として自からを社会化する発達の段階でもある。学生には、市民として自立した日常生活と学業者としての学習活動、さらに地域に参加し活動するといった社会的役割を担う活動を通して、主体的に生きる実感のある生活が重要となる。看護基礎教育の期間は、知的・情緒的・行動表現の技を習得し、自己の質的変容を課題とするところから、授業と実習等が過密なスケジュールになりがちである。本学では、課外活動も重視した運営をしており、青年期の人生的課題<自己同一性から自己の確立>の時期にある学生には、学業も行事や部活動も私的生活も相互に作用しあい、3年間でそれぞれに自己成長が促がされていくようである。この点は今後の研究課題で

ある。

看護実習では、学生は専門職者を目指して、患者中心のかかわり合いの中で看護の役割を果たすことを学ぶ。AC 優位とN型学生は、未熟な自分軸のまま、学習課題として、他者中心のかかわり合いをすべく、自分を抑え緊張と不安定な状況をつくりだし他者を優先する関係を成立させる傾向にある。

大谷²⁴⁾等は、職業的能力としてのやさしさの育成に関して「ニーズ充足型は相手の期待に応え、欲求を満たすレベルの行動であり、真のやさしさ志向型は、相手の立場に立てること、相手を理解できる力量、人間の望ましいあり方への人間観に支えられる、この真のやさしさ志向型こそが看護者に必要とされるやさしさである」と述べている。緊張感の強い学生達には、民主的な実習環境の中で、指導者の教育的関わりに支えられ、人間対人間の基本的な関係を理解し、自己洞察を深め、自己の成長をはかっていくことが重要となる。

看護教育における実習は、自己成長を促進し、人格形成に影響を与える。即ち自己の看護理念の行動化‘CP’、病める人への思いやり‘NP’、事実を検討し、計画的に的確に熟慮した対応‘A’、自然に自分らしく、そしてパワーを発揮する‘FC’、協調する‘AC’といった、多くの刺激を備えている。

V. 結 論

今回の研究で以下のことが明らかになった。

1、自我状態の心的エネルギーの過剰と不足について、‘CP’、‘NP’、‘A’の不足は1～3学年に約10%を占めた。‘FC’過剰は、1学年が約16%で、学年が進むに従って10%以下と少なかった。‘FC’の不足は、1・2学年に約20%弱を占め3学年は8%と高学年は少なかった。‘AC’過剰は、1・2学年が約40%弱と多く3学年は約25%で、高学年ではかなり少ないが、他の自我状態との比較では、学年に占める割合は最も多かった。反面‘AC’不足は、1・2学年は0で、3学年は1人(1.5%)であった。高学年では、1～

2学年より過剰と不足の割合は少く、健全な一般人の思慮分別のある範囲へと心的エネルギーは移動し、人間的成長が促されていることがうかがわれた。

2、エゴグラムからみた学生の特徴は、全学年のエゴグラムも、1・2・3学年の各々のエゴグラムもAC優位のエゴグラムであった。

エゴグラムの形からみると、CP優位のエゴグラムは、‘価値づける私:CP’が最高であるのに対し、‘思いやる私:NP’が著しく低かった。NP優位のエゴグラムは、‘思いやる私:NP’と‘ありのままの私:FC’が高く、やさしさと明るさを発揮している傾向がうかがわれた。A優位のエゴグラムは、‘考える私:A’が最高で、‘思いやる私:NP’は‘合わせる私:AC’より低く、他人を気にする傾向がうかがわれた。FC優位のエゴグラムは、天真爛漫、自分の感情で行動する‘ありのままの私:FC’を最高に発揮し、他のエゴグラムは、著しく低かった。AC優位のエゴグラムは、他人に‘合わせる私:AC’を最高に発揮して、他の自我状態は著しく低く、自分らしさの‘FC’の心のエネルギーは強く抑え込んでいる傾向がうかがわれた。N型のエゴグラムでは、‘合わせる私:AC’が、‘思いやる私:NP’より高かった。これは、看護学生の特徴といわれるN型が‘NP’が‘AC’より高いのに比し、本学学生のエゴグラムの特徴であった。但し、調査時期(学年の前期)による影響も考えられることから今後の研究の課題である。

3、学生数の割合からエゴグラムをみると、FC優位、AC優位、N型が上位を占め、子供的な自我状態Cが主導の傾向であった。三者の合計は、1・2学年は約70%、3学年は約50%を占めた。

VI. おわりに

今回は、各学年の前期のみの調査結果である。次回に学年終了時期の調査結果との比較について検討を加え報告したい。

調査にご協力下さいました学生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 武藤真佐子：エゴグラムからみた看護者の成熟性の特徴、第26回日本看護学会——看護管理分化学会集録集、p. 30~33、1995
- 2) 飯田真佐子他：エゴグラムからみた看護婦の成熟性について、看護展望、11(9)、34-43、1986
- 3) 前掲2)
- 4) 前掲1)
- 5) 多田昭栄尾方美智子：エゴグラムによる看護学生の自我状態の観察、第15回看護教育分科学会集録集、132-135、1984
- 6) 佐藤恵子：看護学生の自我状態の傾向および実習指導に望むもの、神奈川県立看護大学校紀要、37-44、1986
- 7) 木村紀美他：エゴグラムの変動と看護学実習評価との関連、日本看護学教育学会誌、6(1)、p. 45~52、1996
- 8) 稲葉佳江・丸山知子：看護学生の性格特性と自我状態の変化：交流分析研究、14(1・2)、9-16、1991
- 9) ジョン・M・デ1セイ：エゴグラム、新里里春訳、p. 169、創元社、1985
- 10) 池見西次郎、杉田峰康：セルフ・コントロール、創元社、p. 231、1985
- 11) 池見西次郎、杉田峰康、新里里春：続セルフ・コントロール、創元社、p. 152、1984
- 12) 中村晶子他：女性におけるNP成績に関する研究——第1報年代別成績について——交流分析研究、10(2)、53-58、1985
- 13) 杉田峰康：こじれる人間関係、創元社、p. 231、1983
- 14) 前掲8)
- 15) 前掲13)
- 16) 川端寿美子他：看護学生のエゴグラムにみる各学年の指導ポイント(第1報)、看護展望、13(7)、p. 806~810、1988-6
- 17) 佐藤洋子：交流分析の自我状態によるコミュニケーションの特徴、看護教育、26(6)、p. 355~359、1985
- 18) 藤井博英：実習指導の客観的一指標としてのエゴグラムの導入、看護展望、16(5)、p. 75~80、1991
- 19) 前掲18)
- 20) 前掲7)
- 21) 川端寿美子他：実習成績とエゴグラムとの相関についての一考察(第2報)、看護展望、13(9)、p. 1023-1027、1988-8
- 22) 前掲8)
- 23) 前掲1)
- 24) 大谷和代他：職業的能力としてのやさしさの育成——看護学生のやさしさ概念と行動についての調査からの一考察、看護教育、36(5)、p. 405-410、1995

参考文献

- 1) 殿岡幸子：医学生・看護学生におけるエゴグラムの検討、交流分析研究、18(2)、p. 129-134、1994.
- 2) 中川幸子：看護大学生のエゴグラムパターンの特徴——変化群と無変化群の比較——日本赤十字看護大学紀要、No7、p. 44~53、1993.
- 3) 近藤裕子：看護学生の入学時における職業興味領域と性格特性による適正との関連、徳島大医療技術短期大学部紀要、No4、p. 125~131、1994.
- 4) 藤野文代：看護学生の心理的状况と臨床実習による変化、東京女子医科大学看護短期大学
- 5) 赤坂徹他、思春期におけるエゴグラムの標準化、心身医、27(4)、1987.
- 6) 稲葉佳子他、看護学生のエゴグラムによる事故認知の変化と不安定性格特性との関係、交流分析研究、12(1).
- 7) 上田規子他、キャリア形成過程における初期段階の特質、第20回日本看護学会集録——看護教育——1989.